

## ソーシャルワーク実習教育におけるメタ・コンピテンスの追求

○ 兵庫大学 氏名 井上 浩 (2450)

キーワード：ソーシャルワーク実習教育、パフォーマンス評価、コンピテンシ

### 1. 研究目的

ソーシャルワーク実習のあり方については、日本社会福祉教育学校連盟・日本社会福祉士養成校協会教育セミナーにおいて、ミニマム・スタンダード論が討議され、この討議を受けて 2011 年に日本社会福祉教育学校連盟「コア・カリキュラム報告書中の『V群 実践環境に対応したソーシャルワーク実践能力』」にて、その成果がまとめられている。

しかし、教育現場に身を置いているものからすれば、日々の実習に関わる教育は、本当にソーシャルワークに結びついているのだろうか、という忸怩たる思いが強い。実習は、講義－演習－実習というつながりのもとで行われる必要がある教科目である。いわば、ソーシャルワーク実践能力をもっているかどうかを評価するための実習であり、学生からすれば、自分が実践に向いているかどうかや、実践現場に身を置いていけるかどうかを判断する実習としての意味合いも持っている。

このような意味合いがある実習であるがために、実習は妥当性と信頼性を持ち合わせた評価が求められている。それは、単に「実習先で大きなミスをしなかったから」だとか、「毎日無遅刻で実習を済ませていたから」などの理由で評価されるものではない。これまで、実習評価はほとんどの養成校で、3段階評価や5段階評価、いわゆる「できた」から「できていない」という評価基準に基づいた評価となっている。このことは、2009年社養協発行の教員テキストにも、例示として示されている。

実習は単にこれまで学んできた知識を当てはめるのではなく、実習で学んだ内容を学生自らが自分の言葉でとらえ直しながら理論と統合化させていくプロセスである。そして、その評価の方法は実習が終わってから振り返るのではなく、実習中に学生がどのようなパフォーマンスを行ったかという、パフォーマンス評価が求められる。本発表の目的は、学生に求められるコンピテンシーには、どのような領域があるのかということと、パフォーマンス評価を行うために、具体的にどのような評価方法が有効であるかということを示すことである。

### 2. 研究の視点および方法

理論的な背景としては、Bogo, M.らトロント大学ソーシャルワーク学部実習評価チームの評価方法を参考にしている。Bogoを取り上げるのは、Bogoがこれまで何度となくわが国の実習教育、ソーシャルワーク教育に関わる論文に取り上げられていること、現在トロ

ント大学ソーシャルワーク学部が採用しているパフォーマンス評価について、最も先駆的な概念を得られるためである。

### 3. 倫理的配慮

Bogoらの文献調査を主眼に置き、知見から得られた結果についてはまだ実際の教育に反映していないので、現発表段階での倫理的な問題は生じない。

### 4. 研究結果

Bogoらは学生に求められるコンピテンスとして、①学生の個人的な資質、②学生がどのように学ぶのかというその学び方、③実習指導者は、学生が、どれだけ自分の実践を概念化できる力を持っているかに注目すること、④学生の「関係性を作る能力」が必要だと提示している。Bogoは、これらの能力を「メタ・コンピテンス (meta-competence)」と定義し、ソーシャルワークはメタ・コンピテンスをより高次な、第一義的なコンピテンスとし、アセスメントや介入していく能力などを、「手順コンピテンス (procedural competence)」と分けている。

現在のわが国における実習教育で、学生を養成し、実践力を身につけさせるといった場合、メタ・コンピテンスの概念は必要である。それは社会福祉分野に進学し、ソーシャルワーカーとなることを志して入学してくる学生に対し、「ソーシャルワーカーは価値志向の専門職である」という意識を学生にどれだけ植え付けられているだろうか、ソーシャルワーク教育や社会福祉教育が社会福祉士教育と並行して行われ、たいていの養成校で謳われている「実践力を持ったソーシャルワーカーの育成」という言葉が、上滑りした言葉になっていないだろうか。メタ・コンピテンスを保有し、手順コンピテンスを最低限持ち合わせ、学部卒なりのソーシャルワーカーとして社会に送り出せているだろうかという反省のもとで、この概念の有効性を示す必要があるためである。

### 5. 考察

メタ・コンピテンスを評価する方法として、Bogoらは客観的臨床能力試験 (OSCE) を取り上げている。OSCEはもともと医学教育から発展してきた評価方法論であるが、Bogoらは実習におけるパフォーマンス評価、中でもメタ・コンピテンスを評価する方法で有用だと述べる。それは、具体的な事例に基づき学生がパフォーマンスを行った上で、振り返りの時間を設けているからである。

Schon,Dは、「行為の中の省察 (reflection-in-action)」という概念を用いている。省察 (振り返り) の対象となるのは、行為の結果であり、行為それ自体であり、行為の中にある暗黙知で直観的な知である。学生の実習評価も、実習が終わってから振り返るのではなく、実習中に学生がどのようなパフォーマンスを行ったかという、パフォーマンス評価が求められてくる。このことで、「行為の中の省察」がより一層明確になり、学生のコンピテンスを真に評価できることになる。